

サークル活動に 論外な規制

—学生課、不当介入を強行—

早稲田大学入試漏えい事件が明るみに出てから、1カ月余。その早大事件を引き金に、再び、日大裏口入学シンジケート^①の存在がクロージアアップされてきている。それも、日大の。おえらがた^②が、このシンジケートに關与している可能性が、極めて濃厚だという

『今日の学生間の分散情況を見る中で、学内において様々な企画（講演会・映画会・討論会）を行なうことにより、学生相互間の交流と親睦をはかる。』

たった今、学内企画研究会（以下、企画研と略す）というサークルの解体作業が、学部当局によって着々と進められている。

冒頭に掲げたのは、企画研の設立趣旨であり、その活動内容である。企画研のサークル届けを受理し、当初「届け出制は許可制ではない」と明言していた学生課（笹岡氏）は、その後3回にわたる映画会等を不許可にした。いわく、「届け出制にはワクがある」「学生一般を対象とした企画などは、学部当局が行なう」云々。

へサークルとしての存在は認めるが、活動をしてもらっては困る」ということらしい。

こういった、学部当局による一連の「不許可攻撃」に対し、企画研はその都度、異議申し立てを試みたが、結果的には「沈黙」を遂げていた。しかし、定例

討論会を公開するというこ
とにまで当局がクレームを
つけるに至って、企画研は
新たな一歩を踏み出さざる
をえなくなった。

その経過・展開に正確さ
を期するためにも、企画研
の略歴を記しておくことに
する。

79年

11・20 経済学部で学内企
画実行委設立。学生課へ
サークル届けを提出。

11・22 学生課より名称変
更を通達され、「実行委

会届けを学生課へ提出。

180年

1・11 学生課、「学生一般を対象とした企画等は全て学部当局が行なう」として、野坂氏講演会を不許可とする。

1・14 公開定例討論会

「学生の自主活動を考える」を届け出。同日、学生課は「定例討論会を公開するというサークルの在り方に疑問がある」等の理由で、不許可とする

学生課との折衝にかなり

再刊準備版

めいけん

第 18 号

編集発行

「めさき」編集委員会
事務局
東京都千代田区三崎町
1-3-2
日本大学経済学部
1号館8階

を「研究会」に変更。
11・27 羽仁五郎氏講演会
「戦後の日本の教育」。
54 番教室で、学生126名を
集めて開催
12・10 「けんかえれじい
上映会」届けを学生課へ提
出。同日、学術的でない
理由で不許可

経済学部当局による、学内企画研究会に対する対応および主張は、はっきり言ってトンデモナイ。中でも私たちは次の2つの事実に注目しなければなるまい。

①学部当局の主張が、全く一貫していないこと（笹岡氏に言わせれば「ケース

することなく、事務的手続
きとして存在するはずのも
のである。まさに、技術的
要素の占める比重が大きい
ところが、日大経済学部

る。更には、学部当局の価値基準に照らし合わせたところで、許可するか否かを決定する。

このような、現実には「届け出制」が果たしている機能を明確に認識したところで、私たちは次のように結論づけなければならぬまい。

言
い
つ
放
し

般を対象とした企画を学生が組めないならば、何故、学部当局は羽仁講演会を「許可」したのか。

②学部当局の言う「届け出制」が、その実、不許可をも含む許可制であり、検閲制に他ならないこと

「届け出制」とは、学生が届け出た内容をチェック

「届け
の即時
を求め
主

可制」であり、検閲制に他ならない、と。

こうした、学生の自主活動に対する学部当局の不当な介入は、企画研のみならず、全経済学部生を標的とした功妙な学生管理政策の主柱を成している。学部当局は、「届け出制」＝検閲制度を即時撤廃すべきだ。

ていないみたいだ。▼しかし、
し見えて気になる事がある。さ
刑事がやたら上司の命令を
無視して、事件にぶつかっ
て行く事である。最後には
事件を解決してしまうのだ
が、このパターンなら、例
えば出張費用を競馬につ
こんで、そして大穴を当て
て、めでたしめでたしとさ

の時間を費し、情宣も全くだけないままに迎えた討論会当日（1月17日）。「当局の不許可理由では納得がゆかない」とする企画研は討論会の講師として予定していた小林忠太郎氏（元日大講師）と共に、サークル員全員で学生課との直接交渉に臨む。なんと学生課は小林氏の入講をも拒否していた。その理由は、「日本

大学がかつて解雇した教員であり、現在裁判で継争中であるから」。交渉中、応対に出た学生課職員は、企画研側の主張にほとんど耳を傾むけなかった。

このため、直接交渉は実質的に決裂。企画研と小林氏は、誠意ある明確な回答を提出することを学生課に確約せしめ、1時間余にわたった直接交渉は幕を閉じた。

た。同時に、「全く要領をえないう学部当局の一方的な許可理由で、定例討論会を中止することはできない」とする企画研は、35番教室に移動。予定どおり小林氏をまじえ、約30人の学友と共に討論会を克ち取っていた。更に19日、学生課は企画研に対し、不当にも、口頭で「注意」を与えた。

ろうか。そういえば、上三郎の命令を無視する刑事程、い服を着ている。それは、きつとそのためだろう。▼刑事が死ぬ時は非常に面白くなるのだが、刑事をやっている俳優はその番組をやめなければならぬ。だから他の刑事が死ぬ刑事をおわれむのは、あなたが演技だけとはいえないのではないだろうか。▼よく、画面

下級生

土を殴り
林寺拳法同
部通信教育課程法律学科1
年)は、約12時間後に、収
容された日大駿河台病院で
死亡。新井君を殴った神田
雅弘(経済学科2年)は、

殺す 好会は解散

てくる。あそこは写真撮影をする。金をとられるはづである。しかし、テレビに出てくる企業は若干の宣伝料を払うのではないか。一体、どちらが金を払うのだろう。これに限らず、番組中で、意味のない大写の長いカットがあったら、何らかの宣伝と見て間違いない。●実業、企業、

え、少なくとも、偶然の一致、として済ますわけにはゆかないだろう。昨年の東京ゼミナル事件で、妻倉副総長は、2度こうした不祥事を起こさない、と約束された。その舌の根も乾かないうちに、この事態である。徹底した事実究明が求められている。

問題のサークルは、少林寺拳法同好会（野村志摩男（主将）。2泊3日の日程で草津温泉に、前幹部追い出し旅行^{（1）}に行き、14日夕刻し旅行^{（2）}ミート^{（3）}を行なっていたが、上級生の荷物を旅館に忘れてきたことがわかり、旅館へ連絡をとろうとしていた。この際、新

日大における一部武道系サークルの体質を、当局が黙認している状況下にあった起きた事件だけに、3年前の青木君事件（本紙2面参照）とともに、学部当局に対して、強い怒りと疑念を感じざるをえない。

なお、大学当局は、3月3日に開かれた第2回対策委員会で、今後同子

は、非常に高くて、下手な
番組より、面白い。しかも
考えてみれば、民放はCM
が本舞台で、番組がオマケ
なのだから、当然と言え
当然と言える。今のヒッ
曲だって、大低、CMソ
グとして歌われ、ヒッ
ている。いまや、CMは
本文化の担い手になっ
てはいる。

日大副理事長、不正入試に関与か

井君が友だちと話をしていたため、神田が怒って新井君の左アゴを一撃したという。

委員会で、少林寺拳法同好会の解散を決議。神田は、2月15日に謹慎処分につき、来ている。

うか。NHKは面白くないのだらうか。(正三)



11・27講演会

下級生を殴り殺す

少林寺拳法同好会は解散

2月14日午後8時40分頃、経済学部本館前で、サークルの上級生が下級生を殴り殺すという事件が起った。殺された新井孝夫君（法学

えば、少なくとも、偶然の一致、として済ますわけにはゆかないだろう。昨年の東京ゼミナール事件で、妻倉副総長は、2度とこうした不祥事を起こさない、と約束された。その舌の根も乾かないうちに、この事態である。徹底した事実究明が求められている。

部通信教育課程法律学科1年)は、約12時間後に、収容された日大駿河台病院で死亡。新井君を殴った神田雅弘(経済学科2年)は、傷害容疑で緊急逮捕された。問題のサークルは、少林寺拳法同好会(町村志摩男主将)。2泊3日の日程で草津温泉に、前幹部追い出し旅行に行き、14日夕刻帰京しミーティングを行なっていたが、上級生の荷物の旅館に忘れてきたことがわかり、旅館へ連絡をとろうとしていた。この際、新井君が友だちと話をしていたため、神田が怒って新井君の左アゴを一撃したという。

新井君の父親である新井金光さんは、2月19日、編集委に対して「ただただ、親として残念です。こんなことになるとは、夢にも思っていないかった」と語った。日大における一部武道系サークルの体質を、当局が黙認している状況下、当局で起きた事件だけに、3年前の青木君事件（本紙2面参照）とともに、学部当局（参照）とともに、学部に對して、強い怒りと疑惑の念を感じざるをえない。

なお、大学当局は、3月3日に開かれた第2回対策委員会で、少林寺拳法同好会の解散を決議。神田は、2月15日に謹慎処分が付されている。

体どころか金を払うのだろう。これに限らず、番組の中で、意味のない大写真、何らかの宣伝と見て間違いない。▼実際、CMのレベルは、非常に高く、下手な番組より、面白い。しかも考えてみれば、民放はCMが本舞台で、番組がオマケなのだから、当然と言え、当然と言える。今のヒット曲だって、大抵、CMソングとして歌われ、ヒットしている。いまや、CMは日本文化の担い手になっているのではないか。だから、NHKは面白くないのだからうか。

(正三)

強制勧誘が契機となった 青木君死亡事件について、 自らの責任を全く認めない い学部当局の誠意の無さ

3年前に、1人の学友が死んだ。ただ、それだけのことで終わるか。真相が明らかにされる気配はないが、青木君の死をめぐる疑惑は余りにも大きい。私たちは、敢えてこの問題にこだわりたいと思う。

事実関係

事実関係について、日大当局は次のように言っている。
昭和52年4月22日午後6時15分ごろ、日大経済学部本館7階講堂において中国拳法錬心館部員が新入生5名の入部勧誘を行ない、練習を見学させるとともに、新入生5名にそれぞれ筆手

日大経済学部の中で、一年間通過してきた。入学式、新歓、体育大会、三崎祭、試験と行事的にはいろいろあった。その中で感じてきたものは、怒り、焦燥、不安、不満といった、ろくでもない感情ばかりである。日大経済学部というところは落ち着いて物事を考えられない場所である。だから一年の時の僕は自分が一体何に対して怒っているのか、それすらも明確につかめなかった。
新入生、移行生の人も学校に入ってきた時は、物珍しさでそういう感情がわく暇もないかもしれない。しかし、一ヶ月もたてば、真綿で首を締められるような日大経済学部の日常性というものがわかってくると思う。

『初体験の皆さんへ』

達四方八方に厳然として存在するものだ。という事は、よく知っておいてほしい。あなたが一年であるから、

それから、目をそむける事はできる、逃げる事はできるかもしれない。しかし、それが、無視できない、僕

その後の経過

この「青木君の病死」を疑問に思った経済学部生が、事件後1ヶ月余り経ってから、真相究明活動に入る。事件当日、現場に居あわせた人たちが、あるいは、青木君の御両親に会って話を聴く。サークルの入部勧誘の実態調査。青木君事件を報道したマスコミ関係との接触等、3年間にわたり、現在も真相究明活動は続けられている。
その一方で、国会文教委員会では、この事件に疑問

そう感じるのではない。二年になろうが五年になろうが、誰でもが感じている事である。
誰もがおかしいと感じている。でも、それを直す事は今のところではできない。それは僕達の大学が僕達の大学ではないからである。僕達はただのカモである。金をだしても、向こうは何もしない。僕達に命令するだけである。「まっ、それでもいいさ」なんて思わないでください。遠慮とか、悪い事はしてはいけません。僕達が道徳で習った事は、誰も守る事ではないのです。だから、新入生、移行生の皆さんはよく目を見開いて、流されないで、大學生を送ってください。
(編集委員 三村正三)

残された疑問

を抱く議員の1人が、2度にわたり質問主意書を提出し、「責任の所在を明らかにせよ」と、大学当局の姿勢をただしている。
青木君の御両親も、大学当局の「事故処理」に対して不信感を抱き、4項目にわたる「質問書」を学部当局に提出し、誠意ある回答を求めた。(下記、「質問書」および「回答書」を参照して下さい)。「なにによりもまず、真相を明らかにしたい」と、青木君のお母さんは言う。

いったい真相はどこにあるのだろうか。私たちが直接それを知る手立ては今のところ無い。しかし、真相に近づきうる道標は、いくつかの証言として、現に私たちの前に指し示されている。と云えるかもしれない。
①青木君の死亡直後、現場にもいた親友のB君が、「青木君は殺された。助けに行こうとしたが、恐くて行けなかった」と言っているのを聞いた人がいる。
②そのB君に「何もかもありのままをしゃべるんじゃない」と、日大病院の看護婦が圧力をかけているのを、目撃した人がいる。その直後から、B君の証言は「ぼくの角度からは、部員が青木君に手を出したか否

得た限り以下二回答申し上げます。
一、現場の状況、事実経過の詳細については、昭和三十九年四月二十二日午後五時三十分頃、本学本部七階大講堂に集った約五十名の新入生、旧部員、教職員、医務等が、青木君の死について、真相究明活動に入る。事件当日、現場に居あわせた人たちが、あるいは、青木君の御両親に会って話を聴く。サークルの入部勧誘の実態調査。青木君事件を報道したマスコミ関係との接触等、3年間にわたり、現在も真相究明活動は続けられている。
その一方で、国会文教委員会では、この事件に疑問

二、現場の状況、事実経過の詳細については、昭和三十九年四月二十二日午後五時三十分頃、本学本部七階大講堂に集った約五十名の新入生、旧部員、教職員、医務等が、青木君の死について、真相究明活動に入る。事件当日、現場に居あわせた人たちが、あるいは、青木君の御両親に会って話を聴く。サークルの入部勧誘の実態調査。青木君事件を報道したマスコミ関係との接触等、3年間にわたり、現在も真相究明活動は続けられている。
その一方で、国会文教委員会では、この事件に疑問

三、現場の状況、事実経過の詳細については、昭和三十九年四月二十二日午後五時三十分頃、本学本部七階大講堂に集った約五十名の新入生、旧部員、教職員、医務等が、青木君の死について、真相究明活動に入る。事件当日、現場に居あわせた人たちが、あるいは、青木君の御両親に会って話を聴く。サークルの入部勧誘の実態調査。青木君事件を報道したマスコミ関係との接触等、3年間にわたり、現在も真相究明活動は続けられている。
その一方で、国会文教委員会では、この事件に疑問

四、現場の状況、事実経過の詳細については、昭和三十九年四月二十二日午後五時三十分頃、本学本部七階大講堂に集った約五十名の新入生、旧部員、教職員、医務等が、青木君の死について、真相究明活動に入る。事件当日、現場に居あわせた人たちが、あるいは、青木君の御両親に会って話を聴く。サークルの入部勧誘の実態調査。青木君事件を報道したマスコミ関係との接触等、3年間にわたり、現在も真相究明活動は続けられている。
その一方で、国会文教委員会では、この事件に疑問

当局の見解

このほかに多くの反証があるわけだが、以上3点だけをとりあげてみる。青木君の死を「事故死」として決めつけるのが、いかだに難しいかがわかっていただけたと思う。
さらに、ここで注視しなければならないのは、青木君が自らの意志とは関係なく、中国拳法部員による強制勧誘によって、7階講堂に「連行」されたという事

去る3月25日、極めて不当な判決が下された。これは、経済学部を中心に、歴史の流れに沿って「日大」を見つめてきたわけだが、今はこの裁判に視線をすえ、現在進行形たる日大闘争に焦点をぼけてみたい。68年9月4日未明、占拠排除処分という日大当局の要請をうけ、国家権力機動隊は、経済学部隊舎を占

東京地裁で無罪となった。その間、裁判所側は、「現場共謀」を「事前共謀」に訴因変更するよう促したが、検察側はこれに応じなかった。今回の判決は、この点について「法令適用に違法があった」として、無罪破棄・一審への差し戻しを命じたものである。
弁護団はこの判決について、「一審裁判官に検察官の主張を超えてまで有罪とするよう求めたもの」「裁判所が、検察を補完する治安機構の役割を果たしたものと見解を明らかにした。さらに上告して裁判闘争を継続する強い意志を表明したが、全く異論



ゆるぎなき虚構
10 西条巡查部長の死